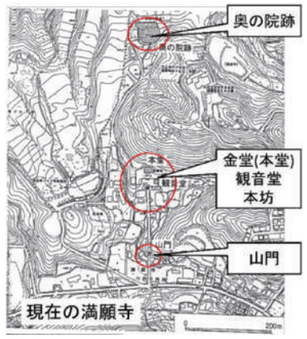
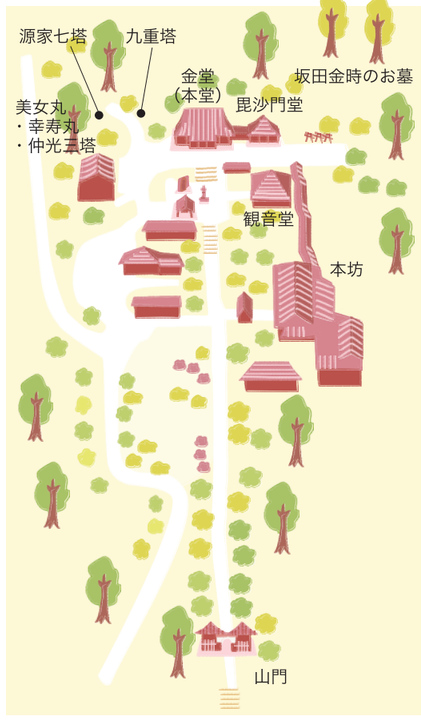
満願寺

満願寺ー一千年間動かぬ本堂

満願寺は、川西市の飛び地になっています。左真ん中の地図は現在の満願寺です。南から山門があり金堂（本堂）、観音堂、本坊があり更に北３００ｍのところに奥の院跡（現在は墓地）があります。この地図は発掘を行った時（昭和60年頃）の地図を使っています。よく見ると左下には今は無くなっている白雪のグラウンドが残っています。





満願寺の境内イラスト

山門（明治 14 年）金剛力士像　鎌倉時代

山門と金剛力士像

上の写真は満願寺の山門です。それほど古くなく明治 14 年に建てられたものです。この中に金剛力士像が安置されており、これは鎌倉時代のものです。元々川西市の多田院（多田神社）に安置されていましたが、明治時代に神仏分離で多田院が神社となり、そぐわないとのことで満願寺に移されてきました。兵庫県指定文化財となっています。

観音堂と千手観音菩薩立像

観音堂は江戸時代の寛文 8 年(1668 年) に建てられたお堂です。お堂の中には平安時代後期の千手観音像があります。平安時代後期の作で兵庫県指定文化財になっています。満願寺の中世文書を見ると「信仰する人は願い事をすれば必ず願いが満る」とあり、なんでも願いが叶うと信仰を集めた仏像です。

千手観音像 平安後期

千手観音菩薩立像。満願寺の命名由来にもなっているご本尊です。

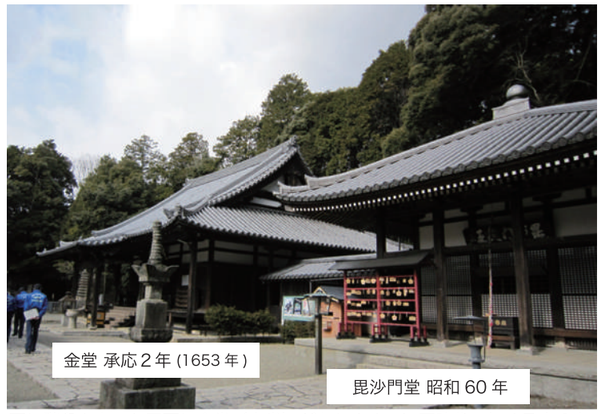
観音堂
寛文８年（1668 年）

山門から更に進んで階段を上り右手を見ると観音堂があります。

宮 殿
室町時代末

十一面観音像
平安後期

聖観音像
平安後期



金堂 承応２年 (1653 年)

毘沙門堂 昭和 60 年

更に階段を上ると正面に金堂（本堂）があります。江戸時代の初め承応２年 (1653 年) に建てられました。

金堂（本堂）

金堂の中に入り拝観させていただくと中央に阿弥陀如来像を安置した宮殿（クウデン）があります。これは兵庫県指定文化財になっています。室町時代の終わりごろ禅宗様という様式で造られています。本当の建物のミニチュアのようなもので、瓦一枚一枚も木でつくられ葺いてあり精巧な造りです。この後ろ左側に十一面観音像（平安時代後期）右側に聖観音像（平安時代後期）が安置されています。

毘沙門堂

金堂の右手にあるのが毘沙門堂で、毘沙門天像（平安時代後期あるいは鎌倉時代にかかるという説もある）が安置されています。毘沙門天像だけ分離し独立したお堂に安置しようということで、新しく昭和 60 年に建てられています。

毘沙門天像
平安後期

様々な文化財が見られる境内

金堂のすぐ左横に花崗岩製の九重塔（鎌倉時代・正応6年）があります。これは国の重要文化財に指定されています。文化財の指定の区分で見ると満願寺で一番格が高いといえます。左横には多田源氏に縁のある7人のお侍のお墓／供養塔があります。写真左には美女丸伝説で有名な美女丸、幸寿丸、仲光の三塔があります。そのほか坂田金時のお墓もあります。

美女丸・幸寿丸・仲光三塔

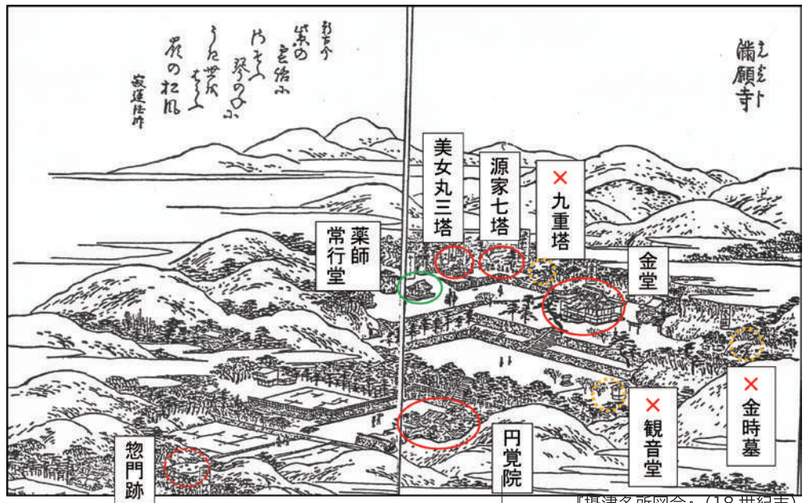
九重塔
正応６年（1293 年）

川西市教育委員会と川西市文化財ボランティアガイドの会（岡野氏所属）が協同で春のお彼岸の秘仏・千手観音像の御開帳に合わせた満願寺ハイキングを行っています。

江戸時代の満願寺

江戸時代の満願寺の絵図

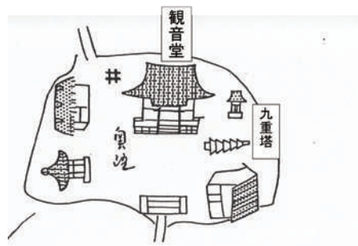
これは江戸時代の絵図で、当時の満願寺の様子が書かれています。これを見ると現在と同じところと異なるところがあります。惣門跡これは今山門があるところです。ここから参道を歩いていくと円覚院がありますが、今は本坊になっています。階段を上り、右を見るとこの図には観音堂がありません。さらに階段を上っていくと金堂があり全く同じ位置です。しかし左横を見ると九重塔がありません。その隣の源家七塔、美女丸三塔はあります。その隣に「やくし」と書かれた常行堂がありますが、今は無くなっています。



現在本坊

『摂津名所図会』（18 世紀末）

右の絵は満願寺のご住職に見せていただいた史料です。今は墓地になっている奥の院の様子が書かれています。真ん中に観音堂のような建物が描かれています。右側には九重塔があります。これらは江戸時代には奥の院にあったということがわかります。



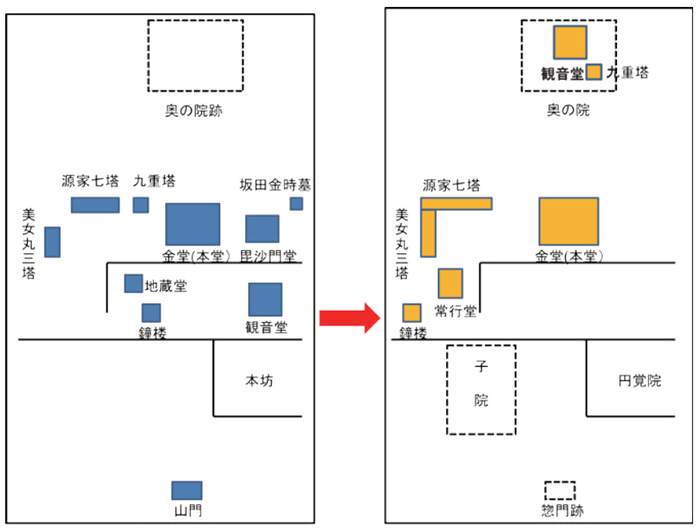
江戸時代『当山絵図』にみえる奥の院

現在の奥の院です。
中央の階段を上っていきます。

中央に石垣で築いた区画があります。おそらくここに観音堂が建っていたと思われます。明治時代に境内整備を行いましたが、この時に観音堂と九重塔が今の場所に移築されたということがわかってきます。

江戸時代の満願寺を復元する

これらを比較したのが下の図になります。江戸時代の満願寺は金堂周辺と奥の院からなっていたということがわかります。



現在の満願寺　　近世の満願寺

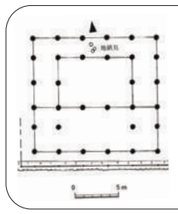
中世の満願寺

発掘調査で大きな発見

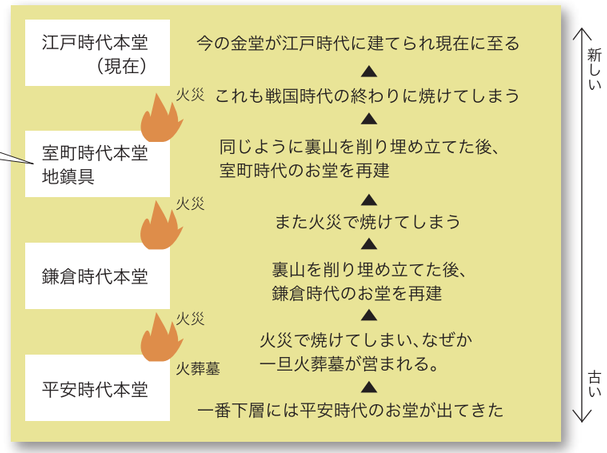
昭和58年に金堂（本堂）を修理するために一旦解体しましたが、この時に金堂（本堂）下層の発掘調査（昭和58年・59年）が行われました。発掘では室町時代のお堂跡が見つかり、お堂を立てた時の地鎮祭に使用した地鎮具（二つの花瓶）が出土しています。現在では神式の地鎮祭が執り行われていますが、当時は仏式の地鎮祭が行われていました。これは大きな発見であったので更に調査を進めていきました。

地鎮具（二つの花瓶）が出土

金堂下層の発掘調査（昭和 58 年・59 年）



室町時代の本堂の復元図
・今の金堂よりも1サイズ大きい
・地鎮具が出土したのはお堂の北端の位置

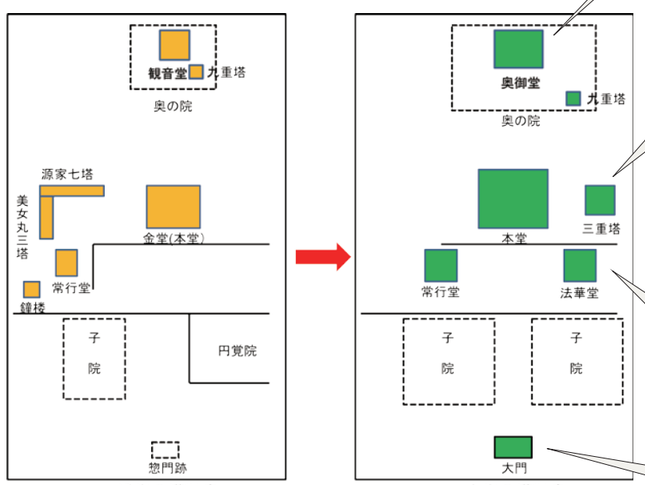


発掘調査でわかったお堂の火災と再建の歴史

発掘で見つかった三つのお堂が建てられている位置は前後には微妙にずれていますが、現在の金堂とほぼは同じ位置であることから下層で見つかったお堂はすべて現在の金堂の前身と考えられます。火災で焼失したものの前の建物が記憶に残っているうちに早急に再建され続けたということでしょう。満願寺の金堂（本堂）は1000年前から同じ位置に建っていたことになります。

中世の満願寺を復元する

江戸時代の様子と比較しますと、中世ではひときわ大きい本堂であったことがわかります。現在の満願寺は金堂周辺に伽藍が集中しますが、歴史的にみると奥の院、金堂（本堂）周辺、大門、それと子院という小さなお寺がたくさんあったようです。



近世の満願寺　　中世の満願寺

満願寺の中世文書では北のほうの奥の院には「奥御堂」という名前が頻繁に出てきます。当然九重塔も図に示すあたりに建っていたと思われます。奥御堂には現存する千手観音像が祭られていました。

現在の満願寺は真言宗ですが当時は天台系寺院でした。三重塔は天台系寺院であった多田院の鎌倉時代の絵図を見ると金堂本堂の右側に建てられているので、これを参考にしてその位置に記載しています

満願寺に伝わる中世の古文書には「常行堂」、「法華堂」、「三重塔」等が出てきます。常行堂の位置は江戸時代の『摂津名所図会』を参考として位置を推定し、法華堂については天台系伽藍では法華堂は常行堂と対をなし本堂の前に建てられるのが普通で、図のように建物の位置を復元しています。

寺の門は栄根寺と一緒の名称で「大門」という山門がありました。